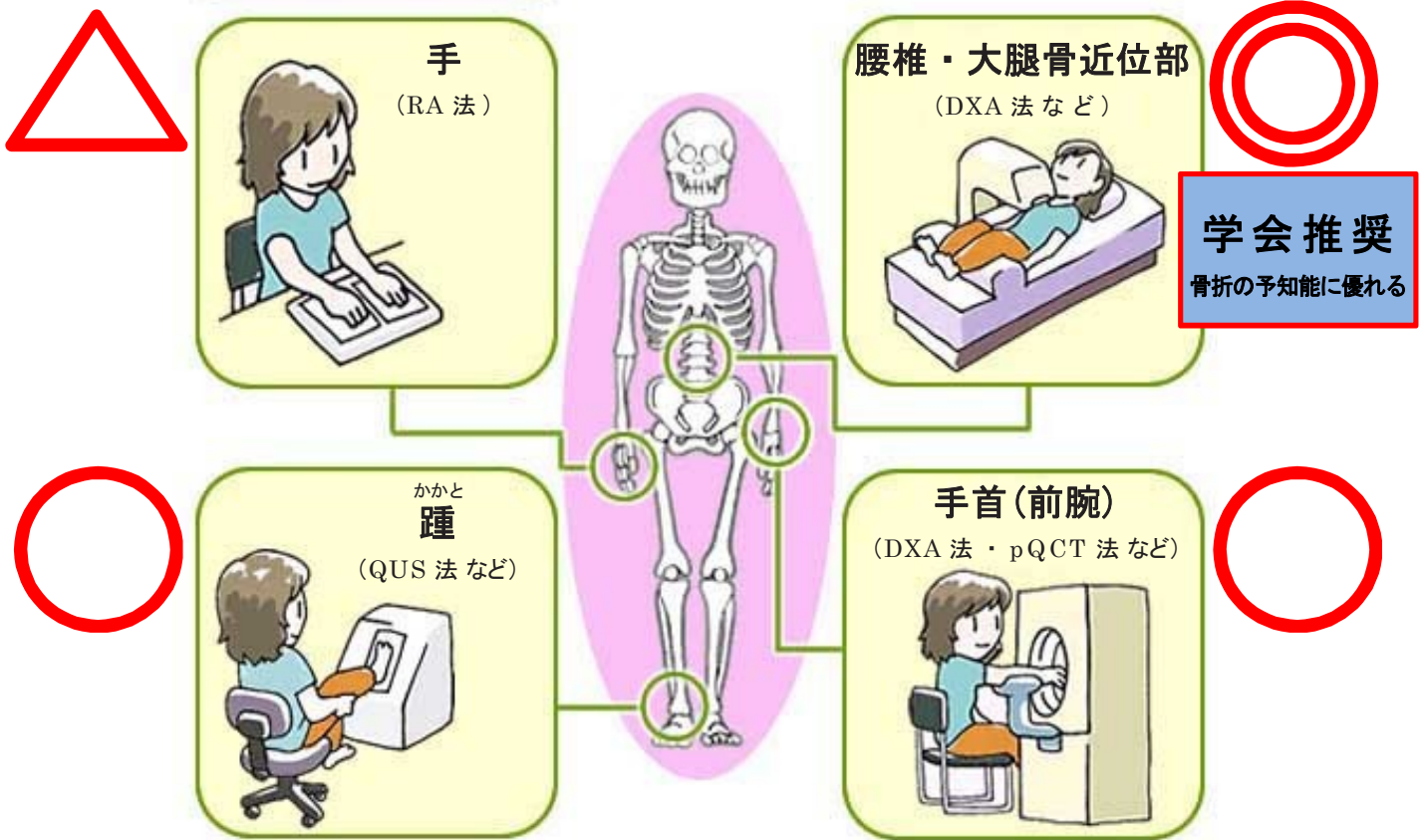


# 骨粗鬆症を予防して健康寿命を延ばしましょう！

平成 29 年 10 月

## 主な測定部位



QUS 法（超音波で踵<sup>かかと</sup>を検査）や DXA 法（手首）にて骨粗鬆症と判定された場合には日本骨粗鬆症学会の【骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン 2015 年】推奨の DXA 法で腰椎や大腿骨頸部による精密検査をしましょう。

当院では大型な DXA 法骨密度測定装置を導入しております。骨粗鬆症が疑われる方は骨密度検査のスタンダードによる腰椎・大腿近位部 DXA 法で検査を受けましょう。

検査を受けたい方は、お気軽にご相談ください。



### 腰椎・大腿骨近位部 DXA 法 : Dual-energy X-ray Absorptiometry

DXA 法とは 2 種類の X 線を利用し測定する方法で、学会で推奨されている腰椎および大腿骨近位部の 2 部位測定には大型で高価な装置が必要です。対象は、①脆弱性骨折を有する症例、②65 歳以上の女性と 70 歳以上の男性、③危険因子（過度の飲酒・喫煙・骨折の家族歴）を有する 65 歳未満の閉経後および周閉経期の女性と 70 歳未満の男性です。大腿骨近位部骨密度は、あらゆる骨折の予知能に優れています。



### 前腕（手首）DXA 法・pQCT 法 : peripheral Quantitated Computed Tomography

前腕用 DXA 装置は小型軽量で安価な装置のため骨粗鬆症のスクリーニングとして汎用されています。ただし腰椎および大腿骨近位部は測定できません。

pQCT 法は末梢骨専用 X 線 CT 装置を用いて前腕骨密度を定量的に求める方法です。橈骨の海綿骨の骨密度を低被曝量で簡便に測定できますが装置が高価なのが難点です。

どちらの方法も学会推奨である腰椎および大腿骨近位部は測定が行えず、第 2 推奨部位の前腕骨で測定します。



### QUS 法（超音波法） : Quantitative Ultrasound

クリニックや人間ドック等で踵（かかと）専用の超音波骨密度測定装置を用い骨粗鬆症のスクリーニングとして汎用されています。メリットは DXA 法と比較して装置が安価な点、小型軽量で移動が可能な点、測定時間が短い点、被曝の問題が無い点、設置場所や被験者の制約が少ない点があります。デメリットとしては、誤差が大きい（3~4%）、QUS 法は骨粗鬆症のスクリーニングなどには用いることはできるものの、原発性骨粗鬆症の診断基準をあてはめた確定診断に使用することはできません。また治療効果の評価における QUS 使用のコンセンサス（意見の一致）も得られていません。



### RA 法（CXD 法または DIP 法） : Radiographic Absorptiometry

アルミニウム標本と手（第二中手骨）を X 線撮影します。「原発性骨粗鬆症の診断基準 2012 年度改訂版」においても骨粗鬆症の診断における骨密度測定方法として取り上げられており、骨粗鬆症の診断に用いることができます。撮影自体は短時間で済みますが、微量な骨量の増減を測定することができないため、治療効果判定には数年が必要となり、モニタリングも困難です。

